1	言語	名前
	言葉の力をつけよう（音読３年④） ［日本文学の代表作「源氏物語」］	

日本文学を代表する作品の一つに挙げられるのが紫式部が書いた「源氏物語」です。作り物語の流れと歌物語の流れとが一つになった長編物語です。

やってみよう

この章段は、主人公「光源氏」の親の代から子や孫の代まで続く壮大な「源氏物語」の冒頭部分です。味わって読んでみましょう。

《解説》

特に高い身分ではない桐壺の更衣が帝の寵愛（身分の高い人からかわいがられること）を一身に受け、他の女御・更衣たちのねたみを買ってしまいます。そのためでしょうか病気がちになって里下がり（実家に帰ること）をすることが多くなりましたが、そんな様子の桐壺の更衣を帝はますます寵愛し、やがて美しい皇子（光源氏）が誕生します。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。初めよりわれはと思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。朝夕の宮仕えにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえはばからせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人などもあひなく目をそばめつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れあしかりけれと、やうやう天の下にもあぢきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃のためしも引きいでつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにて交じらひたまふ。（後略）

《読んだ回数》

1回　2回　3回　4回　5回　何度も　合計　回

読めたら色をぬろう！

朗読　暗唱

1

言語

言葉の力をつけよう（音読３年④）
〔日本文学の代表作「源氏物語」〕

名前

解説

★知っておきたい古典の知識

『源氏物語』は**『竹取物語』**に始まる**伝奇物語(作り物語)**と、**『伊勢物語』**のような歌物語のどちらの要素も併せもった作品です。四代の天皇の時代が描かれ、全編で**五十四帖**あり、年数にすると約七十余年にもわたる大作となっています。内容は、光り輝く貴公子「**光源氏**」のドラマチックな生涯を描いており、当時の人々にもてはやされたようです。（**『更級日記』**では、都で評判の「源氏物語」を読みたいと神仏に祈る筆者の**菅原孝標の女の**姿が描かれています。）**『源氏物語』**は古典作品として優れているだけでなく、人間とは何かを深く考えさせる、高い文学性をもつ、日本文学を代表する作品といわれています。

身に付けると…

平安貴族の生き方に触れることができます。平安時代の人々のものの感じ方・考え方を知ることができます。
今と変わらぬ人間の心情、ものの感じ方、考え方も感じ取ることができます。

読んでみよう

《口語訳》

どの天皇の御代であったか、女御や更衣などたくさんの女官がいらっしゃるときに、それほど高い身分ではないが、とりたてて天皇の寵愛を受けていらっしゃった方があった。（宮仕え）の当初から我こそは（天皇の寵愛を受ける）とうぬぼれていらっしゃった方々は、この方を気にくわないものとさげすんでねたまれる。この方と同じくらいの身分の方や、それより低い身分の方は、さらに心中おだやかでない。（このお方が）朝夕の宮仕えをなさるにつけても、他の方々の心をやきもきさせ、恨みを買うことがつもりつもったからであろうか、ひどく病がちになって、なんとなく心細い様子で里にひきこもることが多くなっていかれたのを、（帝は）ますます愛おしくお思いになって、人が何と言おうとおかまいになることなく、後世の語り草になってしまいそうなご寵愛ぶりである。身分の高い公卿や殿上人たちも、合点のゆかぬ様子で目を細めては、「たいそうなご寵愛ぶりであることよ。中国でもこのようなことが原因で、国が乱れたりしたのだそうだよ。」と次第に世間でも、苦々しく人の悩みの種になって、楊貴妃の例まで引き出されるようになって、この方には不都合なことが多かったけれども、（帝の）ありがたいご寵愛がこの上ないのを頼りに宮仕えを続けていらっしゃった。

《語句の説明》

時めきたまふ…「栄えておられる」という一般的な意味から、ここでは、「帝のご寵愛を受けておられる方」という意味になります。

あつしく…「篤しく」。病弱に。はしたなし…不都合だ。
上人…昇殿を許された四、五位の貴族のこと。殿上人。
楊貴妃…中国の唐の玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛したばかりに国が乱れたという史実に基づいた伝説があります。

《平安時代の貴族の生活》

平安時代は、有力貴族が娘を天皇の后とし、娘の生んだ皇子の外戚（母方の祖父）として政治の実権を握っていました。したがって、身分の低いものが寵愛を受けるのは、政治が乱れるもととなったのです。